



第116回

直木賞作家・北村薫さんが語る阪神愛

※2025年10月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 3

さかのぼること22年前。ミステ
リー小説の老舗出版社として知ら
れる創元社から一冊の書籍が刊行
された。その名も「新本格猛虎会
の冒険」。プロ野球・阪神への愛
が深い作家を中心に組まれたアン
ソロジード。

その冒頭の作品を書いたのが直
木賞作家の北村薫さん。阪神は関
西の熱狂的なファンのイメージが
強いが、北村さんは生まれてこの
方、埼玉県在住だ。2年ぶりのリ
ーグ優勝について、「関東の虎党」
に阪神を愛するゆえんを尋ねると、
優しさで矛盾に満ちた答えが返っ
てきた。

野球にさほど興味がなかった北
村さんが阪神ファンになったのは、
早稲田大に通っていた頃。当時は

巨人の9年連続日本一（V9）の
時代だったが、「のべつくまなし
に同じチームが勝つのは良くない
な」と感じた。

最初は日本シリーズで巨人に敗
れた阪急（現オリックス）が気に
なったが、当時はパ・リーグの情
報が少なかった。そこで、漫画「巨
人の星」で主人公のライバルがい
た阪神にスライド。1968年に
阪神の江夏豊投手が巨人の王貞治
選手からシーズン354個目の奪
三振を奪って最多記録を更新し、
最終的に401個（現在もプロ野
球記録）まで伸ばしたシーズンに
遭遇して大ファンになった。

やはり、うれしかったというの
が85年の阪神日本一。球団初の日
本シリーズ制覇を伝えるスポーツ

新聞を買いあさり、今でも大切に保管している。

阪神はその後、長期低迷し、いわゆる暗黒時代が続いた。「それは、つらいつらい年ばかりでした」

そのせいか、かえって強く印象に残っているのが2005年の日本シリーズだ。ペナントレースを制して臨んだ阪神は、パ2位からクライマックスシリーズ(CS)を勝ち上がったロッテにまさかの0勝4敗で屈した。

「ロッテ、強いなど。2位だからと批判する人がいましたけどおかしいと思いましたね。今は切り離されているけど、CS覇者こそがリーグ覇者だと制度を変えて、たたえるべきじゃないか」と持論を展開する。

03年に参加したアンソロジー「新本格猛虎会の冒険」では、「五人の王と昇天する男達の謎」と題した短編を執筆。ミステリー作家仲間と、同じく熱烈的な阪神ファンとして知られる有栖川有栖さんを作中に登場させ、有栖川さんが小

学生のころ、地図帳で「阪神工業地帯」という字を見ただけで血が騒いだというエピソードを暴露した。

北村さんの本来の作風は、代表作の「田柴さんと私シリーズ」や、09年に第141回直木賞を受賞した「鷲と雪」のように、ミステリーでありながら優しさに満ちているのが特徴だ。虎兇として血をたぎらせるイメージとの乖離かいりが大きく、長年、不思議に思っていた。

その点を尋ねると疑問は氷解した。「(阪神は)暗黒時代が長かった。そこで寄り添うことは優しさじゃないですか。見放すことなくね。もてはやす時だけもてはやすのとは違う」

23年の日本一から2年で再びリーグ制覇。今まで阪神には存在しなかった黄金時代の到来が期待される。だが、同じチームが勝ち続けることに違和感を感じたのが阪神ファンとなるきっかけだった北村さんのポリシーに反するのではないか。

最後におそろおそろ聞いてみる
と、苦笑いしながら答えてくれた。

「それは……」のぶつくまなし
に勝ってほじります
「お」